

必要な支援をいち早く。いのちへの共感

平成28年熊本地震の被災地への支援

4月14日以降、連続して発生している「平成28年熊本地震」に対し、迅速な被災地支援を行うため、熊本地震豊岡市災害対策支援本部会議を開催し、市独自の支援対策などを進めてきました（5月16日現在2回開催）。

また、消防本部では、4月16日から22日まで、緊急消防援助隊として、熊本県益城町などで捜索活動などに従事しました。

【5月16日現在の支援の状況】
【支援先】熊本県菊池市・大津町・益城町
【物的支援】飲料水ペットボトル、避難所用ウレタンマット、おむつ、生理用品、歯ブラシセット、歯磨き粉、ウェットティッシュ、ごみ袋、割りばし、ラップなど

【人的支援】避難所運営支援、緊急消防援助隊、家屋被害認定士の派遣
【その他】義援金や市営住宅への被災者の受け入れ募集

【今後の支援】
県・関西広域連合の支援と連携し、人的支援（市職員などの派遣）を重点に、益城町に対して支援していきます。



▲緊急消防援助隊（消防本部）の捜索活動（4月17日）



▲支援物資を届けるため本庁舎を出発する車両（4月17日）

突然の自然災害に備える！ 市内に海拔表示板・津波避難場所誘導表示板を設置

海面からの高さを記した表示板を、主要な避難場所（68カ所）と、41本ある浸水実績（平成16年台風23号）標柱に追加設置しました。

また、津波発生時、港地区と竹野地区の沿岸部の観光客らが、指定避難場所へ避難できるように、電柱に津波避難場所誘導表示板を設置しました。自然災害への備えを充実させます。



▲津波避難場所誘導表示板

▲海拔表示板を追加した本庁舎前の標柱

インターネットトラブルに巻き込まれないために！ 全中学校で「くらしの安全安心講座」開催

4月28日から、豊岡市消費生活センターの相談員が、市内の全中学校で「くらしの安全安心講座」を行っています。

この講座では、中学生が、消費生活や消費者被害の知識を深め、トラブルに巻き込まれたときの適切な対処方法を学んでいます。

城崎中学校では、インターネットトラブルの事例紹介で、生徒が寸劇を行い、分かりやすいトラブルの対処方法を楽しく学びました。



▲生徒が寸劇で事例紹介（城崎中学校）

主な市政の動き

【4月】

- 13日・豊岡市基本構想審議会（5月10日）
- ・ウィットマン中学校国際交流体験学習使節団来訪（18日）
- 16日・被災地に緊急消防援助隊派遣（20日・18日）
- 17日・被災地に物資輸送隊出発（20・22日）
- 20日・春季市政懇談会（竹野、25日・日高、26日・城崎、27日・出石、5月10日・豊岡、13日・但東）

【5月】

- 6日・被災地の家屋被害調査に職員派遣（14日）
- 11日・水道まつり
- 13日・「東北大学 未来の暮らし方を育む泉の創造 豊岡研究室」開所式
- 27日・被災者の市営住宅受け入れ募集

「自然に抱かれた豊岡の新しい暮らし方の創出に向けて」

「東北大学 未来の暮らし方を育む泉の創造 豊岡研究室」設置

本市では、平成25年度から

東北大学名誉教授の石田秀輝さん、同大学院環境科学研究科准教授の古川柳蔵さんとライフスタイルデザインの共同研究を行っています。

研究では「自然に抱かれた豊岡の新しい暮らし方」の普及に向け、シンポジウムや講演会、石田名誉教授による小学校での出前授業、雪を利用して食材を保存する雪室の実

証実験などを進めています。

今後、さらに多くの市民や企業が参画し、豊岡型ライフスタイルの創出基盤を構築するため、豊岡稽古堂に古川研究室の分室を設置しました。大学職員や学生は常駐しますが、この研究室で、年6回の古川准教授のワークショップの開催や、市と企業などが連携し、豊岡の新しい暮らし方を研究します。

「喉歌（ホーミー）や馬頭琴（ばとうきん）でモンゴルの伝統音楽の演奏会」

日本・モンゴル民族博物館20周年記念「嵯峨治彦コンサート」開催

4月24日、日本・モンゴル民族博物館で、開館20周年記念コンサートを開催しました。

日本・モンゴル民族博物館は、モンゴル国の文化を日本に広く伝えるために、平成8年11月に開館し、モンゴル近代絵画やチベット仏教コレクションなど、5千点以上を収蔵しています。

今回、開館20周年を迎えるに当たり、馬頭琴の演奏で数々の国際的な賞を受賞して

いる嵯峨治彦さんを迎えて、馬頭琴・喉歌コンサートを開催しました。

コンサートでは、モンゴルの伝統音楽などが演奏された他、嵯峨さん夫婦のユニット「野花南」による馬頭琴の演奏に合わせた「スーホの白い馬」の朗読も行われました。

当館では、このコンサートをスタートに、来年春まで、さまざまな記念事業を開催します。



▲嵯峨さん(左)の演奏に合わせ「スーホの白い馬」の朗読



▲開所式で看板を披露(左から古川准教授、書家の木積凜穂さん、中貝市長)

中貝市長の徒然日記 ⑩

子どもたちにほほ笑みを

ゴールデンウィークに、娘が1歳になったばかりの娘の娘を連れて帰ってきました。肩車をし、ぶんぶん飛行機で部屋の中を飛び回り、ご飯を口の中に入れ、頭からジャバットとお湯をかけて洗髪するなど、ぼくは生き物係でした。かいあって、2人の間に良好な関係が生まれ、娘の娘が泣き始めても、ぼくが「カラス」の歌を歌い始めるとびたつと泣き止む、という神技を披露できるまでになりました。

昔読んだ本に、テニスコートでプレーする2人の選手は、ボールを打ち合っている限りコートから離れることはないのと同様に、原子核を構成する陽子と中性子はπ中間子を互いにやりとりすることで結び付いている、というようなことが書いてありました。π中間子は、湯川秀樹博士がその存在を予言し、ノーベル賞を受賞された粒子です。なるほど。原子核の世界で

も何かのやり取りを続けることで関係が維持されるのか。

滞在中、娘が豊岡在住の友人たちとランチで会うことになりました。が、ほとんど皆、乳幼児連れです。いつ泣き叫ぶかもしれない子ども連れを受け入れてくれる店がどこにあるのか。以前あるレストランを予約しようとしたら、泣かないと約束していただけならOKという話でした。他の客のことを考えると当然の対応と言えます。しかし。全て、とは言いません。泣き声OKの部屋がある店があればいいな、と思います。

コンサートもそうです。豊岡で一昨年から始まった「おんぶの祭典」では、子どもの泣き声、騒ぎ声OKのコンサートも用意されています。飛行機や列車に乗っても、いつ泣き叫ぶかと両親が肩身の狭い思いでいる、という話を聞いたこともあります。穏やかなやり取りを遮断されて親たちが立ちすくむ。ではなくて、子どもたちにはほほ笑みを。人々が子どもたちにはほほ笑みかけるまち。それって、素敵だと思いませんか。